

バッティングの技能と協力した守り方を簡易化したゲーム(高学年)

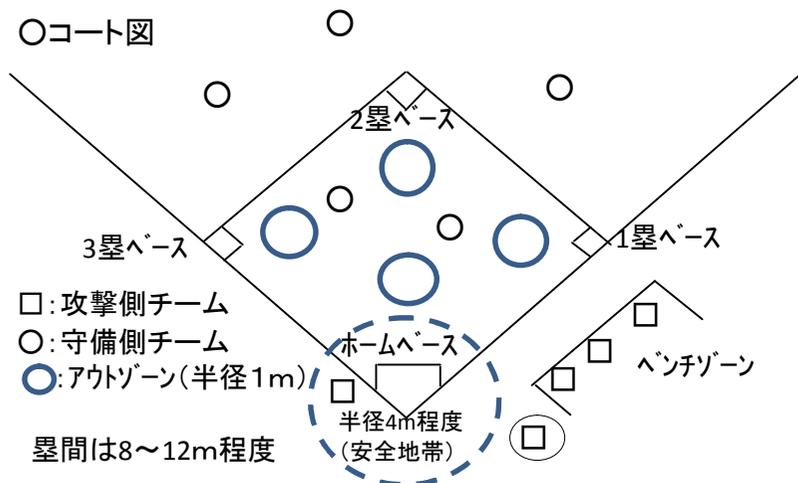
先回りベースボールⅡ

(引用)学校体育実技指導資料 第8集 ゲーム及びボール運動 平成22年3月文部科学省 東洋館出版社

○教材の特長

- ・高学年のベースボール型のゲームは、「チームとして守備の隊形をとってアウトにする動き」が学習課題となるように工夫する必要があります。
- ・そこで、下図のようにアウトゾーンのサークルを設け、守備側の大切な課題となるアウトを取るための判断や協力したプレーができるようにしています。
- ・また、「ティーボール」ではバッティングティーを使い、止まっているボールを打つことにより、攻撃の仕方を易くしています。

○コート図



○準備物

- ・直径15cmの大きめのゴム製のボール
- ・バッティングティー
(打つときのボールの台、手作り教材でもよい)
- ・プラスチックバット
- ・ベース 4枚(ない場合は、ラインカーで書いてもよい)
- ・得点板など



整列して、あいさつからゲームを始めます。



安全のため、ベンチゾーンで応援します。



ボールをよく見て打ちます。
安全地帯には、バッター以外の人は入れません。



打者走者がベースに着く前に、守備者はその塁に先回りしてボールを運び、その塁のアウトゾーンに2人入ることができれば、打者走者をアウトにすることができます。

○ルール

- ・5人对5人でゲームを行い、守るときの内野・外野の守備位置はチームで工夫します。
- ・両チームが2回攻撃したら、ゲーム終了とします。
- ・アウトになった塁の手前まで、ベースを1つ踏むごとに1点を与え、チーム全員のベースを踏んだ数を総得点とします。また、攻撃側の全員が打ち終われば、攻守交代します。
- ・打たれたボールを守備側が捕球し、塁上の走者(打者)の状況を見て、進塁を止められる塁のアウトゾーンに2人がボールを持って入り、走者よりも早く「アウト」と言ってしゃがめば、アウトを取ることができます。
- ・塁審は打者や走者が塁に着くときには「セーフ」と声を出し、「アウト」「セーフ」のどちらの声が早いかで判定するとよいでしょう。



学習が進むにつれて、中継プレーも出てきます。



アウトにならないければ、2周目を走ってもよいことにすると、大量得点が期待できます。

○指導上のポイント

- ・ベンチゾーンを作り、バットやボールが当たらないように安全面への配慮をする必要があります。その際、待っている攻撃側のチームは、ベンチゾーンで得点を数える役割をしていくとよいでしょう。また、半径4m程度の安全地帯を設け、その中には打者だけが入ることができるようにしましょう。
- ・高学年の「先回りベースボールⅡ」では、送球するプレイが大切になってきますから、ボールの投げ方や捕り方は中学年までに身につけておくように指導しましょう。
- ・「どこに集まればアウトを取れるか、声をかけ合って動こう。」などと助言し、守備側がアウトを取るための判断や協力したプレイができるようにしていきましょう。
- ・学習が進んだ段階では、攻撃側が打つ際には常に走者を1塁に置いたところから攻撃をスタートするようにし、守備側の「どこでアウトにするのか」についての判断を難しくしてもよいでしょう。例えば、打者走者を先回りして2塁でアウトにした場合、打者走者は1塁を踏んだことになるので1点。そして、1塁走者は先回りされなかったのがホームまでの帰還が認められて、2塁・3塁・ホームベースを踏んだことになるので3点となり、合計4点の得点が入ることになります。このようにして、1番バッターから5番バッターまで走者1塁からの攻撃を繰り返し、その合計点をチームの得点としていくとよいでしょう。
- ・判定や得点は、審判チームをつくり塁審をしたり、得点を数えたりする役割を与えていくとよいでしょう。審判チームをつくれな場合はセルフジャッジとし、判定に迷った場合は両チームのじゃんけんによって決めてもよいでしょう。